
リプレイ(プロローグ)

Key の馴れ初め

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リプレイ（プロローグ）

【Nコード】

N3599BA

【作者名】

Key の馴れ初め

【あらすじ】

主人公 坂上優人は、明るくどこにでもいそうな主人公だった。幼馴染の中原夢乃と学園でも、一緒につるむことがおかった。

自称ヤンキーの黒沢祐一 転校生の永瀬 三月

クラスの学級代表 瀬川涙子 後輩の宮ノ内ナツミ 読書家の青井大空

ともうまくやっていた。

そしてある時主人公は、クラブを作ろうと考え出す。

その名は、『探検部』 オカルトや謎の謎の謎を解明しようとする好奇心

の現れそれと『あの6人に部に入ってほしい』と言う願望

・・・そして、全員集まり 部活に励むようになった。

やっけて行くうちに友達関係も作れて、いい雰囲気になっていく。

「成功したな」

かけがえのない思いでが一個一個と刻まれて行く。・・・だがそこには、大きな黒い闇が存在するんだった。

部に行くにつれ、メンバー達の闇 過去が見えてくる。

それは、壮大過ぎて 今にも、押し潰れそうなくらいだ。

謎の少女の伝言 メンバー達の闇 その両方のことが一気に起こり

主人公の黒い過去がまた強来する。

主人公はこの真実を受け入れることが出来るか!!

メンバー達の闇を取り払って運命を変えることができるだろうか

そして、あのみんなが楽しく生き生きしていた部活まで構成できるか

坂上優人 中原夢乃 青井大空 瀬川涙子 永瀬三月 宮ノ内ナツ

ミ 黒沢祐一は、まだこの結末を知らない・・・

どこにでもいる主人公

『世の中は、敵だらけだ』

この言葉は、父親が死んだ直前に言った名言だ・・・
いやっ さすがに直前は、おかしい残したと言った方が正解か

矢とかが飛んで来て父親に当たって、この名言を言ったワケではない
病院で入院中に出た言葉だ！！
そこんとは、修正よろしく・・・誰に言っただろう！！
これじゃあ初めっから内容重すぎて、話に支障がでてくるかなあゝ・
・・・いやあゝだから 誰に言っただってーの！！

この名言が出たのも、夢を見たからなのである
あの頃のこと夢から出て来て、今 現在 学校の用意をしてる時
に『あゝ あんなこと言ってたなあゝ』みたいななつかしさに浸っ
ていたからである

(今となつては、悲しさなんて微塵もないんだけどね)
あの時は、どうだったか忘れたけど

「まあゝ 夢のことより今 現在 時刻の方を気にしなくてはい
けないのが事実なんだけど」

(見事なまでの現実逃避)
我ながら笑いが出てくる

「はっはは」

本当に声をだして笑って見た

すると、虚しさだけが残る

(親 両方いないしね)

1人で笑っても、当たり前かあ

「さく」と もうそろそろ現実と向き直ろうかな

その次の瞬間

「やべーよ 遅刻だよー!! ど どうする」

むちゃくちゃ慌てる

(見るこれが本当のギャップ萌え) なんつって・・・

「つてか 言ってる場合じゃないよね 俺！」

人間というのは、無理だと思ったら、とことんダメなんだなあ」と
実感した

(時間 見ると最早 100%遅刻組だ)

こうなると行く気をなくす

(ふっふ ふふ お兄さん今日 学校サボっちゃいますかい)

俺の悪い声が自分に語りかける

「まっ そんな声も、聞かずに行くのは絶対なんだがな」

一瞬にして、悪が吹き飛ぶ

(さらば悪よ)

手を振ってやる

まあここからダッシュで着替え 学校に着いたのは、1時間目の
終わりだった

不良高校生 『黒沢祐一』

休み時間と言っても、俺は1時間目を遅刻についやしたため受けてないと変わらない

(いやっ 受けてない 実際には、受けてない)

何か回りくどい言い方になってじったが

まあ1時間目があの鬼教師と名高い理科の先生だったから、遅刻でよかつたかなあ〜と思ってしまう・・・はははみんなはさぞかし疲れただろうな

(ははは・・・)

一人でこんなことしても、面白くないなあ〜

何か『地底人来襲』とか『学校崩壊の危機』とかならないものかねなったら なったでヤバイきもするが

「・・・・・・・・」

暇だなあ〜

横を見ると黒沢が気だるそうにイスをギィギィと鳴らしていた

「やあ〜黒沢 おはよー」

話を振って見た

「・・・・・・・・ああ!..!」

黒沢は、俺の顔を見ずにそう気だるそうに言う

(やっぱり そんな反応か)

「どうだったあゝ理科の授業 面白かった」

つとめて明るく言う

「面白いワケねーだろー!!」

まあ〜サボリさんには、関係ない話だ」

サボリさんって、俺のことかなあゝ

いやあゝひどい言われようだ

これは、弁解しなければ

「黒沢さんよー 俺は、サボリではない
れっきとした寝坊と言う理由がある」

「俺からしたらどうでも言い話だ」

と言って目を閉じる

これじゃあ俺は、サボリやろうみたいなのレツテルを貼られるじゃな
いか

俺のプライドにかけても・・・意味ないところで燃える俺

「黒沢 俺の話を聞けーっ!!」

「うっせー 呼び捨てにすんな!!」

「俺は、サボリでは」

「2回も、繰り返し返すな!! 1回でわかる
だから お前黙れろざい」

見事に言われてしまった

はっはは これは、たまげた

まさか俺が口でしかも、一言で言い負かされるとは

俺 本調子じゃないん（自分の体に聞く）

いやあ そんなことはないと体さんも、言ってるようだ

「ねえ〜 祐一 昨日何してた？」

「黙れ んなこと教えるか!!」

一 警されたが名前からの苦情は、ないようだから 勝手に解釈しちやえ的なノリでそう呼ぶことにした

「祐一 2時間目って、何の授業だったか」

「知らねーよ 自分で前に行って見て来いよ」

前に行く・・・なぜそんなめんどくさいことを？
まあ〜いつか!!

今日 この休み時間 祐一に絡みまくってやる
暇な時の俺は、恐いんだぞー くっくく

「祐一 幽霊とか信じるたち？」

「信じねーし 興味ねー」

「祐一 俺のこと友達だと思ってる？」

「嫌いだ お前を見るのも嫌だね！

ってか しゃべんな!!」

相当嫌われてるなー俺
ちよっと傷つく・・・

「祐一家 行っでいい？」

「しゃべんなって言ったすぐにしゃべんなー！」

「そのツツコミ苦しくない 絶対かみそうだよ」

「うるせー ってかもう黙れー！」

その時にチャイムが鳴る

いい時になりやがって、渋々 俺は、祐一から目を離れ 前を向く
先生も、同じぐらいに教室に入っで来る

勉強は、真剣に聞かないとな！

ノートを開き教科書を開いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3599ba/>

リプレイ(プロローグ)

2012年1月12日01時48分発行